

国際教育交流における“Third Culture”

ー 留学生の日本留学目的と高校生の異文化間能力をつなぐ ー

広島大学森戸国際高等教育学院 恒松直美

はじめに

本稿では、日本の大学の交換留学生と地域学校の高校生とのオンライン国際教育交流における“Third Culture”の場に焦点をあて、交換留学生の日本の大学への留学目的と高校生の異文化間能力¹について論じる。大学国際化が叫ばれ、世界ランキングを意識した大学の国際競争や留学生の獲得競争が激化する中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）は国際移動に制限をもたらし、留学や国際教育の在り方を大きく揺るがした。ポストコロナでは、ICTが有効活用され、VE (Virtual Exchange)やVM (Virtual Mobility), BL (Blended Learning, Hybrid Learning ともいう)による教育が組み込まれ、留学や国際教育交流の傾向が大きく変わる可能性（太田 2021）が指摘されている。従来の「留学」の定義と形式が変容する中、留学による教育成果とされてきた異文化体験や異文化理解がバーチャルで代替可能であるかは今後の研究を要する。

元来、「留学」とは、ホスト国に移動して現地での生活の中で学ぶものとして想定され、ホスト国の地域学校や地域住民との国際交流は対面で行うものとして企画されてきた。しかし、コロナ禍では、国際交流も対面からオンラインへと移行せざるを得ない状況が発生した。本稿では、「留学」の概念が揺らぐ今、交換留学生が留学で重要視する日本文化体験の一つである国際交流が持つ意義について留学生と高校生の双方の観点から考察することを試みる。現在、「オンライン留学」も一つの留学の形態となり、入国を待ちつつオンラインで日本の大学の授業を受講する状態にある交換留学生が多く存在する。交換留学の派遣・受入の実施は各大学で決定がなされ、安全性や諸事情により留学を断念する学生も存在する。

本研究では、2014年度より広島県立日彰館高等学校において開催してきた広島県立日彰館高等学校と広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）²留学生との「吉舎おもてなしプラン」国際交流会に焦点をあて、留学生と高校生の双方を結ぶ場として筆者が創り出してきた場を“Third Culture”として捉え、留学生の日本への留学目的と高校生の異文化間能力の観点からその意義を探る。パンデミック下の状況で留学や国際交流がニュー・ノーマルへの対応と継続的な改善策を迫られる中、“Third Culture”としてのオンライン国際交流が交換留学生と高校生に持つ意義を考察し、今後の新しい教育の発展に生かしたい。

¹ 異文化間教育学会研究委員会において、「異文化間コンピテンシー」という用語について、英語の文献では intercultural competence が、その邦訳では異文化間能力が一般的であると確認されたため、「異文化間能力」の用語に変更するとしている（異文化間教育学会）。その用語使用に鑑み、本稿では「異文化間能力」を使用する。

² 以後、「広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program）」を「HUSA プログラム」と称する。広島大学は、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの31か国の95大学及びUSAC (University Studies Abroad Consortium)とUMAP (University Mobility in Asia and Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結し、これまで911名が参加している(2021年1月時点)。HUSA プログラムは1996より開始され、毎年約40~60名の留学生が「HUSA プログラム交換留学生」として広島大学に1年間または1学期留学している。

グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」国際交流行事

2021年度のオンライン国際交流会は、筆者の”Japanese Society and Gender Issues”の受講生がフィールドワークとして参加した。交換留学生は日本への入国を待つ状態にあり海外から参加した。日彰館高等学校の「おもてなしプラン」は、地域・日本文化の紹介等を通して高校生が留学生におもてなしをすることを目的として2014年に開始された。2015年度より筆者が学校の全体行事として国際交流会を企画して導入し、2021年度で7回目を迎えた。筆者は英語と日本語による司会進行で参加者全員が言語能力に関わらず参加することを目指してきた。2021年度は「令和3年度吉舎おもてなしプラン 縁～つなぐ・つながる田舎主義～」をテーマとし、2020年度に続く2回目のオンライン国際交流会となった。吹奏楽部によるウェルカム演奏に続き、留学生の自己紹介、留学生からの学校生活に関する質問、高校生からのクイズなど約40分の交流を行った。「おもてなしタイム」では、書道・剣道の日本文化紹介、中学校平和学習発表、地域紹介、ホストファミリーからの挨拶を行った。留学生を含む広島大学学生22名、日彰館高等学校生徒178名、吉舎中学校1年生22名、吉舎小学校6年生16名、地域のホストファミリー1名の計239名が参加した。イギリス・フランス・アメリカ・メキシコ・ロシア・中国・香港・タイ・バングラデシュ・日本からの参加者がオンラインでつながる体験となった。³

交換留学生の留学目的：日本語能力習得と日本文化理解

日本文化を学び体験することが主な留学目的である交換留学生にとり、ホスト国の日本人々との交流は、日本留学で最も貴重な体験の一つであり、大学外の人々と接する貴重な機会である。Asada (2020)は、アメリカ人学生が日本を留学先として選択する主な3つの理由として、第1点目に日本のユニークさ、2点目に中国以外のアジアへの入り口としての選択肢、3点目に日本の経済力を挙げている。日本に留学する目的は、第1が日本語の習得(98.9%)、第2が日本への興味(98.1%)である(Asada 2020: 57)。また、60%の学生が日本留学がもたらすキャリアの発展の可能性をあげ、69.1%が将来日本で働くことを希望している(Asada 2020: 57-58)。さらに、日本のユニークさに加え、新しい社会的・文化的・言語的体験や日本語を学ぶ困難により、日本留学をする学生が未知の国際的経験に挑戦する貴重な存在となると指摘する。以上の点からも留学生が留学中に日本社会とつながる重要性が分かる。世界各国の交換留学生が半年から1年間、日本の大学に留学する主な目的は、専攻分野に関わらず、日本文化の理解と日本語能力の習得である。第2の目的は、大学時代にしかできない交換留学の体験により、新しい異文化の環境で新しい自己発見と新しい可能性への挑戦をすることである。第3の目的は、日本留学がもたらす将来のキャリアの可能性の向上である。高校生との国際教育交流はこれらの留学目的の達成と関わるとともに自国で容易に体験できない貴重な体験である。

「留学」と異文化感受性の習得：ホスト文化との接触

日本に留学する大多数の交換留学生は、専攻に関わらず、日本語と日本文化の学びを主な目的

³ グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」国際交流行事の発展については、恒松(2020)参照。

としている。留学生の日本語能力と日本文化の知識習得レベルは様々であるが、留学先のホスト国に身をおくことで異文化間能力が自動的に形成されるわけではない。Bennett (2012) は、異文化に関する知識自体は異文化間能力ではなく、知識を生かすためにはその使用方法を知ることが必須であると論じる。しかし、異文化感受性 (“intercultural sensitivity”) は自然発生的には習得はできない。

McKeown (2009: 20) は、大学のキャンパスにおいて、学生の成長とプログラムの成果を促進する体験を意図的に組み込む重要性を強調する。また、プログラムディレクターが不在の場合や、オリエンテーションや指導的学習が組まれていない場合、異文化間の融合に負の影響を及ぼす (Citron 1996) 点にも言及している。McKeown (ibid.) は、十分な異文化接触がプログラムに組み込まれる重要性 (Engle & Engle 2003) に触れ、プログラムの性質と内容が学生のホスト国の文化との関わりに影響すると主張する。

日本語能力習得と日本文化理解を目的として日本に留学する交換留学生にとり、地域高校との国際交流やホームステイは、日本の人々との接触が体験できる場であり、留学意義を高めるものである。現地の学生や地域の人々と関われるかどうかは、出発前からの留学生の懸念事項でもあり大きく期待する点でもある。日本の地域の人々との関りは日本で生活して自然に発生するものではない。留学生と高校生の国際交流とホームステイは、大学の担当教員と高校教員の関り合いにより初めて実現する。ホスト文化との関りについて異文化間能力を高める教育的支援がない場合、学びが限定的となったり、ホスト国での異文化接触での文化的相違に戸惑い、ホスト文化をステレオタイプ化して認識する結果となることも多々ある。

交換留学生は、未知の世界である日本での交流に様々な期待をもって来日する。日本で生活すれば日本の学生と交流できるとの期待を持って来日し、実際には関りが持てない現実と直面し失望する学生も多い。留学生と留学先の大学の学生との関りが簡単に構築されないことは多くの研究により証明されている。言語の障壁、文化的障壁、ソーシャルスキルの欠如、教育的支援の欠如など、様々な要因が異文化接触に影響する。さらに、Vande Berg, Paige, and Lou (2012: 3-5) は、アメリカの高等教育における政府の留学プログラム財政支援において、プログラムのタイプに関わらず学生が効率的かつ容易に学びを得られるとの認識があること、スカラシップを授与される学生が、授業外での国際的支援のないプログラムに参加している実態、留学による教育成果よりも留学者数の増加に大学教育の焦点がおかれている実態に関し、警鐘を鳴らしている。また、留学により学生が自国文化と異なるホスト文化に身を置くことで、自身の力で自然に異文化に関する知見とグローバル社会で生きる知識・見解・スキルを習得するとの誤認識を大学の教職員が持っていると警告する。留学による異文化圏への移動で学生が自動的に異文化を理解し帰国するとの見解を疑問視する研究が発展しつつある中、日本人学生の中には簡単に入れないとの交換留学生の声は研究結果を裏付けている。

異文化を学ぶパラダイムとして Vande Berg, Paige, and Lou (2012) が紹介する、異国の言語文化や行動様式に触れ知識を習得することを重要視する “positivist”、ホスト国の新しい異文化の環境に身をおくことを重要視する “relativist”、実際の経験と教育的指導の重要性を説く experiential/constructivist”の3つのパラダイムのうち、留学生と地域学校との国際交流は “experiential/constructivist”のパラダイムに属する。留学生は留学前に身に着けた日本語能力や日本文化の知識を高校生とのインタラクションの場で実践知として体験する。高校生は書道・剣道・茶道などの日本文化紹介により歓迎し、事前準備を生かしつつ容赦のない現場での異文化インタラクションを

体験する。対面での交流会の際は、グループワークを導入して自己紹介や質問に答える時間を設けた。留学生と高校生にとり、受け身的な体験となるか、能動的体験となるかは、国際交流を企画・指導し、その場をファシリテーションする教育的支援にかかっている。さらに、交流会を学びの場とするには、交流会後に体験をリフレクションし異文化体験を相対化して捉える教育が必須であり、その支援が次の意義ある体験へとつなぐ可能性を拡大する。

オンライン国際交流についての高校生のリフレクション：「異文化間能力」の認識

2021年度の「おもてなしプラン」国際交流行事では、新たな評価指標を試行し、生徒が自由に「振り返り」について記載する自由記述欄も設け、高校生が留学生との国際交流の体験を自己省察する場を創った。William Howell（1982）の4つの文化認識（Paige, Cohen, Mikk, Chi, and Lassegard 2014: 103-104）によれば、異文化間能力の認識の状態は、自身に異文化間能力が無いことを理解していない状態（“unconscious incompetence”）、自身の異文化間能力の無さを認識している状態

（“conscious incompetence”）、自身の異文化間能力を認識している状態（“conscious competence”）、自身の異文化間能力を認識していない状態（“unconscious competence”）の4つのカテゴリーに分類される。173名の生徒のリフレクション（振り返り）から、国際交流会の体験を通じ、「異文化間能力」という概念を意識しない状況で、生徒自らが自身の「異文化間能力」について何らかの認識をしていることが分かった。以下に、生徒の自己省察の内容を異文化間能力に焦点をあて、項目別に整理した。

1. 英語能力の必要性の認識と英語能力向上への動機づけ

リフレクションで一番多かったのは英語能力向上を切望する声である。容赦のない現場の英語に触れて英語力不足によるもどかしさを実感し、英語を理解して言いたいことを伝え、留学生とよりつながりたいとの思いを募らせている。「普段聞いている英語とは違った風に感じました」、「どうにかして外国人たちの英語を聞きたらいいなと思いました」、早すぎてあまり聞き取ることができなかったのも、日ごろの英語の勉強を大切にしようと思いました」、「もっと勉強して聞き取りたいと思いました」、「ネイティブの英語はとても聞き取るのが難しかったが、単語を聞き取ることが少しできるところもあって、意味を考えながら聞けたので楽しかった」、「英語の発音が向こうの人達と（自分たちは）全然違った」、「時々（大学の）先生と外国人が二人で笑っていたので、何がおもしろいのか分からなかった」、「留学生の方のスピーチや質問を理解しようとしたけど、ほとんどわかりませんでした。留学生の方はしゃべるのが早くて耳が追いついていかなかったけど、そのスピードについていければ入試にも対応できるのかなと思いました」、「全ては分からなくても、自分の分かる単語から何となく内容が分かったりしたのでよかったです」、「中学校とは違って英語が少しだけ分かった気がしました」など、刺激を受けつつ様々な自身の英語の理解力を認識している。「公用語が英語でない国の人も英語がとても上手かったのに驚いた」からは世界での英語使用の現状を垣間見た姿が伺える。

2. 留学生の日本語能力習得の観察による自身の英語能力習得への影響

「外国の方たちが日本語で話していてとてもすごかったです」、「相手の方は英語しかしゃべらないと思っていたが、日本語を流暢に使っていたので驚きと尊敬の気持ちであった」など、留学生の日本語

能力への賞賛の声は多かった。「何人かとても上手に日本語を話している人がいたので、がんばって勉強しているんだなと思った。僕もがんばって勉強して英語が話せるようになりたい」、「留学生の中には日本語がペラペラの人がいてすごいなと思った。日本語はとても難しい。でもそれを使いこなしている留学生の人たちを見ているととても勉強していることが分かる。同様に僕たちも英語を勉強すべき」、「質問やスピーチの際に日本語で頑張って話そうとしている方や英語でも一生懸命話されていて学ぼうとしている姿がかっこよかったので自分も英語を主体として積極的に学んでいきたいです」など、留学生の日本語習得や第二外国語としての英語習得の努力から刺激を受けている。

3. オンライン国際交流による距離を超えた交流への喜びと今後への希望

「ネイティブの英語を聞き取ることは難しかったけど、分かり易く先生が説明してくれたのでわかりやすかった」、「人との繋がりに制限がある今であるが、お互いに交流することに価値があると思いました」、「やはり国を越えての交流は良いなと思いました。普段使わない慣れない英語だけど伝えようとする心があれば話すことができるんだとわかった。」、「日本の文化と外国の文化を理解し合えるようになっていきたいと思いました」のように世界とつながる喜びを表現している。「自分の一つの夢の海外の人とゲームを話をしながらする一步を踏めた」、「外国人達がすごく優しくポジティブな方々で話を聞いていてすごく感心した」、「色んな国と一つになれた気がして楽しかったです」、「留学生からの質問や生徒からの質問でよりお互いのことを詳しく聞けて面白かったです」、「留学生のスピーチから生徒が聞いてみたいことを質問したり、逆に留学生が日本のことについて気になったことを質問してそれに答えるという国際交流がしっかりできたと思いました」と相互理解の場を楽しむ姿があった。

「この先外国人と関わる機会があれば生かして行きたいと思います」、「距離があっても同じ時間をオンラインで共有できたことはとてもいい経験となりました」、「今回の交流会で他国の人との交流に興味を持ち、いつか外国に行って交流したいと思いました」、「他の国の方達と交流する機会は人生において数えるほどしかないと思うので今回の国際交流は貴重なものになったと思う。8か所をオンラインでつなぎ、交流することに対して少し不安だったけど、とても充実したおもてなしプランになった。来年は実際に留学生の方を吉舎に招いて交流し、異文化理解についてもっと深めたいと思った」から、今後の交流への意欲が見て取れる。「やはりオンラインは味気ないと思った」、「私達3年生にとって最後のおもてなしプランで実際に会って交流できなかったのは少し寂しかったです。でも無事に開催することができて嬉しかったですし、協力して下さった方にはしっかり感謝したいです」、「やっぱり生のパフォーマンスの方が見ていて楽しいから早くそういう機会ができればいいと思った」、「来年こそは直接会って交流できればいいなと思いました」、「来年コロナ禍が収束したら、積極的に留学生と一緒に英語や日本語で会話できるようにしていきたい」、「自身もいつかホストファミリーで受け入れる体験をしたい」から感謝しつつも対面の交流への強い希望が読み取れる。

4. 異なる価値観の認識・自身の態度の振り返り・世界に目を向ける態度

「日本人と違って海外の人は話すしよく笑うなと思った。海外の人はやっぱりオープンだなと思った」、「急に当てられた人も全員が質問をすることができていてすごいと思った」など積極的に意見を述べる態度を賞賛している。「コロナの影響が全世界規模なんだと改めて実感した」、「吉舎から海外につながる事がすごいと思った」、「コロナの影響で日本に留学してこれなかった人とつながることができ

てよかった。海外の人とつながることはすごく貴重だから、今日のことを大切にしたい」からコロナ禍で留学生がおかれた現状を生で知る体験となっていることが分かる。「留学生の方が来日したら華茶道でおもてなしをしてみたい」、「進学先でおもてなしプランのような国際交流の行事などがあったら積極的に参加したい」、「将来留学をしたいと思っているので、今日のおもてなしプランはとても勉強になりました」から国際交流の体験が将来の国際的な関りに影響することが伺える。

「昨年も今年もすごいクオリティですごかったです」、「ネットや自分たちが知っている答えじゃないのが返ってくるので会話してるのを見てとてもためになったし楽しかった」、「画面内でもすごく笑顔で見ていた私も自然と笑顔になりました」など飾らない現場を体験していることが分かる。「日本の人々はシャイ（恥ずかしがり屋）だというのは確かになと思った。今回でも自分から手を上げて発表をしている人がとても少なかったので発表できるように頑張っていきたい」、「次は当てられた時にいつでも答えられるようにしていきたいです」、「声が小さく、聞き取りにくかったらしいので、もう少し、次このような機会がある場合は、はっきりとわかりやすいように言えるようにになりたいです」からは、国際的な場での自身の態度を省察し次につなげようとする姿が見える。

5. 留学生からの日本文化やジェンダーに関する質問からの学び

「書道や剣道などの日本の文化についても知ってもらえたと思うので良かった」、「留学生が日本、吉舎について知ろうとしてくれていて嬉しかった」、「海外の方ならではの新しい視点からの質問にびっくりしました」、「留学生からの質問は自分達が思っていたより深いことを聞かれたので驚きました」、「留学生のスピーチ、質問では、自分では考えたことのない方向からの質問が飛び交っていたり、たくさんさんの刺激に触れることができました」、「日本に興味があったり、日本について知りたいことがある海外の人が多いということも分かったし、コロナの影響で日本に行くという体験もできないことも分かった」から留学生の日本に関する質問が新鮮であったことが分かる。

「海外からの日本の印象を聞いたのが良かった」、「質問を聞いて日本の文化と海外の文化でそれぞれの見方が違うんだと知りたくさんのことを学ぶことができました」、「海外から見た日本と自分たちから見る日本とでは見方が異なるんだと改めて実感した」、「日本のことも外国のことももっと知っていきたいと思いました」から異文化から見た日本を知るとともに、「私も日本のアニメが好きなので共通点を知れて親近感が湧きました」のように共感する機会にもなっている。「日本人の優しさが好きと言ってもらえてとても嬉しかったです」、「笑っているからシャイっぽくないとおっしゃっていたが、日本人は間違いなくシャイだと思う」など日本人の特性も考える場となっている。「日本の部活動について、男女限られたスポーツはあるかどうかという質問があって、日本は、ほとんどの部活で男女でできるのが決まっているし、男子テニス、女子テニスに分かれていたりするのが一般的だけど、海外では縛りがないのかなと思った」、「部活の中で男女の縛りは日本にはあったけど外国はどんなのか気になった」、「日本の学校の校則のことを聞いたりして、関心を深めることができた」など、日本の学校とジェンダーについての留学生の質問により興味が喚起されている。

6. 自身の地域文化や学校内のクラブ活動を知る機会

「1年生が吉舎のことを留学生に伝えることができて良かったです。自分も吉舎の知らないことについて知ることができました」、「書道のカッコイイパフォーマンスや剣道の技について見ることで

きて楽しかったです」,「この交流を通して私たちの学校のクラブの活動を見られてとても感動しました」,「書道のパフォーマンス動画を見て感動しました。吹奏楽部の演奏も感動しました。どちらも生で見てみたいなと思いました」,「書道部と剣道部の紹介も迫力があって来年もしたかったけど今年で最後なのでしっかりと頭に残しておきたいです」から自校のクラブ活動を知る機会が生まれ感動している姿が見える。地域と世界とがつながる場を体験し「つながる田舎主義」を実感している。

7. 国際的体験を持つロールモデルによる動機付け

国際交流会の司会進行をした大学教員、留学生、他の高校生をロールモデルとして捉えている。「大学の先生が英語がすぐ話せて、訳できて、コミュニケーションもすごくて英語話せるようになりたいってもっと思いました」,「先生のようにぺらぺらしゃべってみたい」,「大学の先生の英語のトーク力もすごかったです」のように国際経験のある大学教員に刺激されている。「Kさんが助けてあげていたので助け合いが大切だと思った」では支援する態度を他学生から学んでいる。「質問や答えを出すときにジェスチャーなどがあれば、言葉が分からなくても伝わるんだなと改めて思いました」,「言葉の壁というものがある中でも、ジェスチャーや雰囲気でだいたい相手の感情などがわかったりするのだなとも感じた」は、言葉を超え伝えようとする態度の重要性の認識である。「外国人の留学生の方たちは日本語も上手で、発表者への心遣いが素敵で私もこんな風になりたいと思いました」,「留学生の中には日本語をしゃべれる人がいたし、3年生は英語で受け答えもしていて交流ができていたので外国の言語を勉強して交流し合うことのすごさが実感できました」から、留学生が見せた心遣いと留学生の質問に受け答えできた先輩の生徒をロールモデルとして捉える姿勢が見える。

結語：“Third Culture”の場を作り出す教育的支援がもたらす異文化間理解

おもてなし国際交流会は、交換留学生が日本の人々と交流し日本文化を学ぶ留学目的を実現する場であり、高校生が自身の異文化間能力について状況的認知をする場でもある。交流会の司会・進行を担当する大学教員が、留学生と高校生の双方から相互の文化への興味を喚起し、英語と日本語により双方からのコミュニケーションを引き出しつつ、共感の場となる“third culture”を交流会で創り出してきた。Castiglioni and Bennett (2018: 235)は、異なる文化グループの協同の場では、誰がどの標準に合わせ、誰が標準を決定するかが課題となると論じている。この課題は、文化の相違や文化の行動様式に焦点をあてた文化トレーニングの領域を超えた異文化への配慮に関わる問題であり、問題の真髄は、自身の文化背景を生かしつつ、異なる価値観をどう共に社会に包含するかにあると主張する（前掲）。“Third culture”は、異なる文化が単に存在するのみでは生まれず、文化背景の異なるものが相互に適応しようとし共感する場で生まれるものであり、組織に新しい価値をもたらす（Bennett 2018: 236）。

おもてなし国際交流会は、日本文化に興味を持つ留学生と日本文化を伝えたい高校生が教員の教育的支援でつながる場である。双方に相手が自身の言語を話す姿を見て、自身も相手の言語を話し相手の文化や考えをより深く知りたいとの気持ちが喚起される。仲間や先輩が異文化に対応する姿や日本文化を紹介する姿からも学び感動する場でもある。リフレクションの一部を英語で書いた生徒は、自然と気持ちを英語で書いてみたくなったのであろう。また、「私達3年生はその楽しさを知っているけど、知らない人達もいるのでぜひ味わって欲しい」、「大切に引き継いでいってほしい」と対面

を経験した3年生から後輩を思いやる声もあった。「日本に来ることができた際には日本を目一杯楽しんで日本の魅力を感じてくれたら嬉しい」とコロナ禍で入国を待つ留学生への心遣いもあった。留学生顧客論の批判的観点もあるが、本国際交流会は、留学生が日本のおもてなしの心を体験し、留学生と高校生が相互に共感する貴重な場となっている。おもてなしにまつわる歴史や礼儀も学ぶことで学びも発展するであろう。「いくらグローバル化が進んでいるとはいえ、外国の方と関わる機会はあまりないのでいい体験になりました」は、地域学校の生徒の国際体験が日常ではない現実の指摘である。

Fagan (2021: 162) は、「人間はつながるようにできている。よりインクルーシブになることが私達の世界には必要である」と述べ、「ダイバシティとインクルージョンを個人的なものとして捉えない限り何も変わらない」と主張する。一人一人の生徒がおもてなし国際交流会の場を心で感じ取っている。高校生のリフレクションからは、新しい世界をもたらす留学生とのつながりを求め、留学生の知る新しい世界を知りたいと真摯に望む姿と今は見えない未知の世界への第一歩が明確に見えた。

参考文献

- Bennett, Milton. 2012. "Paradigmatic Assumptions and a Developmental Approach to Intercultural Learning." In *Student Learning Abroad: What Our Students are Learning, What They're Not, and What We Can Do About It*, edited by M. Vande Berg, R. M. Paige, and K. H. Lou, 90–114. Sterling: Stylus Publishing.
- Castiglioni, Ida, and Milton J. Bennett. 2018. "Building Capacity for Intercultural Citizenship." *Open Journal of Social Sciences* 6 (3): 229-241.
- Engle, Lilli and John Engle. 2003 Fall. "Study Abroad Levels: Toward a Classification of Program Types." *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 9 (1): 1-20.
- Fagan, Helen Abdali Soosan. 2021. *Becoming Inclusive: A Worthy Pursuit in Leadership*. Charlotte, NC: Information Age Publishing, Inc.
- McKeown, Joshua S. 2009. *The First Time Effect: The Impact of Study Abroad on College Student Intellectual Development*. Albany, NY.: State University of New York Press:
- Paige, R. Michael, Andrew D. Cohen, Barbara Kappler Mikk, Julie C. Chi, and James P. Lassegard. 2014. *Maximizing Study Abroad: A Students' Guide to Strategies for Language and Culture Learning and Use*, 2nd edition. University of Minnesota.
- Vande Berg, Michael, R. Michael Paige, and Kris Hemming Lou. 2012. "Student Learning Abroad: Paradigms and Assumptions." In *Student Learning Abroad: What Our Students are Learning, What They're Not, and What We Can Do About It*, edited by M. Vande Berg, R. M. Paige, and K. H. Lou, 3–28. Sterling: Stylus Publishing.
- 異文化間教育学会 <https://sites.google.com/site/interculturalcompetenciesj/home> (2021年12月30日閲覧)
- 太田浩 (2021) 「高等教育国際化の未来 – ポストコロナの国際教育交流を考える –」『高等教育研究』第24集 日本高等教育学会編, pp.111-130.
- 恒松直美 (2020) 「高校生と交換留学生の異文化間インタラクションの挑戦–異文化理解教育推進プログラム『吉舎おもてなしプラン』国際交流–」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第18号, pp.51-64.

謝辞

広島県立日彰館高校と地域の皆様に心より感謝の意を表します。